

氏名：今井野依

留学先：アウグスブルク大学(ドイツ)

地域活躍コース



アウグスブルク



ドイツ国旗

1. アウグスブルクについて

2022年秋から2023年夏に、ドイツのアウグスブルク大学に留学しました。

起源は紀元前15年にローマ初代皇帝アウグストゥスが築いた城に由来する古都です。中世期には帝国都市として栄え早くに司教の支配から脱し帝国自由都市となりました。

15~16世紀には活版印刷やフッガー家等により金融都市として繁栄しました。カトリックとプロテスタントが一時和解した1555年の「アウグスブルクの宗教和議」も有名です。第二次世界大戦中は兵器会社等がおかれ、空襲で深刻な被害を受けましたが、現在はバイエルン州で人口・面積ともに三位の都市にまで復興しています。同時に自然豊かな街でもあり、バイエルン最大、ドイツの市町村では三番目の森林面積を有します。レヒ川/ヴェルタハ川/ジンゴルト川が流れ、2019年には「アウグスブルクの水管理システム」が世界遺産認定されました。

一年を通して日本より気温が低い傾向にありました。冬は寒さが厳しく雪がよく振り、夏は湿度や体感温度が低く虫もそれほど見かけませんでした。スーパー等を除けば冷房殆ど設置されていませんでした。特に夏は降雨で9~10度まで落ち込んだり7月~8月は雷雨や雹を見たりと変わりやすい天気でした。



<https://www.tatsachen-ueber>

deutschland.de/en/germany-book-edition-2023



街並み



アウグスブルク大学

2. 国民性、地域性、食文化について

日本ではドイツ人のことを真面目、厳しい、誠実、外向的ではない等と評するのを聞いたことがありました。実際には人それぞれで、幸いなことに私は周囲に恵まれて留学生活を送れました。一方で、ドイツ語の授業の中で『ドイツ人の自己認識』が扱われたとき、日本で言われていたようなことに近い内容も多くでてきました。節約家、計画性がある、なども挙げられていました。ドイツでの『理想の生き方』への考え方が一部反映されているのかもしれない。

シュワベン料理はソースを多用する栄養豊富で素朴な料理です。ひき肉とほうれん草を包んだラビオリのマウルタツシェンや麺を肉に付け合わせたシュペッツェレ(イタリア)等があります。バイエルン全体では、ドイツ版饅頭のダンプフヌーデルやジャガイモ料理のクノーデルなどもありました。小麦やジャガイモと並んで肉が料理の要となっていました。

魚料理はスーパーの寿司やフライ以外はあまり見かけませんでしたが、サーモンはよく食べられていました。

3. 埼玉親善大使として

日本人学生と日本語勉強中の学生の交流会に出席し、それぞれ勉強中の言語で会話や食事・ゲームをしたり、タンデムで言語や文化を教えあったりしました。私は、埼玉県からの和紙や埼玉県生まれの飾り消しゴム、お菓子などを紹介もしました。



また、埼玉県の文化や魅力について、歴史や気候・交通網等と絡めて「基礎情報」「現代産業と伝統工芸」「農業と食文化」「自然と祭事」に大きく分け、ドイツ語を用いてプレゼンテーションを行いました。

「埼玉を知っていますか(Kennen Sie Saitama?)」から始まったプレゼンの後、「私たちは埼玉を知らなかったが、今は貴方のおかげで知っている」と声をかけられ、喜びと達成感を感じました。埼玉の憲章やシンボル、歴史やおすすめの食べ物・アクティビティなど幅広い質問もありました。

4. 自分の活動

ドイツ語授業を B1 レベルまで受講しました。文法では時制、会話では滑らかな提案や質問、作文ではメールや応募動機、記事の書き方など実用的な部分に力を入れました。語彙は、派生した単語や品詞もあわせて覚えました。

帰国した後も学習を続け、現在はドイツ語検定 2 級の受験を計画しています。



また、アウグスブルク大学では法学部に所属し、「国際法の近年の展開」「コンベンション・ロー」「欧州契約法」「国際仲裁」等を受講しました。国家間・個人間で発生した国際紛争を取める際に適用される法や制度、実際の流れを特に勉強しました。環境問題やウクライナ戦争等の時事や、欧州統合に際しての契約法の整備なども扱いました。試験は筆記と口述が半々で、後者は四人一組で与えられたテーマについて議論する形でした。これら全て英語で受講するなかで、ドイツ語と並んでスキルを向上させられたと思います。



5. 最後に

2022 年 10 月から 2023 年 8 月までのドイツ滞在中で、上記した内容は勿論生活面でも多くの学びがありました。留学準備を始め、居住許可申請、口座開設、生活費等のやりくり、健康維持に至るまで自分からプランニングし、自発性と計画力を鍛えられ、自信をつけられた得難い経験となりました。

今後どのような形で海外と関わっていけるかはまだわかりませんが、今回の経験を糧としてまた挑戦していきたいです。